

經濟社会学会 編

經濟社会学思想の史的展開

經濟社会学年報・II

新 評 論

経済社会学会 編

経済社会学思想の史的展開

経済社会学会年報・Ⅱ

新 評 論

編集委員（アイウエオ順）

大林 信治（大阪大学）
北野熊喜男（神戸学院大学）
斎藤 正二（日本大学）
佐藤 良一（大月短期大学）
戸田 信正（同朋大学）
橋本 昭一（関西大学）
向井 利昌（神戸大学）
吉田 昇三（近畿大学）

経済社会学思想の史的展開

（検印廃止）

1978年11月20日 初版第1刷発行

編集代表者 早瀬利雄

発行者 二瓶一郎

発行所 株式会社 新評論

〒160 東京都新宿区西早稲田 3—16—28 電話 東京(202) 7391番
振替 東京 6-113487 番

印刷 熊谷印刷
製本 稲田製本所
落丁・乱丁本はお取替えます

©早瀬利雄 1978年

3033—330133—3177

Printed in Japan

経済社会学会 編

経済社会学思想の史的展開

経済社会学会年報・Ⅱ

新 評 論

目次

I	総説——経済社会学の生い立ち……………	七
	はじめに……………	七
二	デュルケーム学派の経済社会学……………	八
三	歴史学派と経済社会学（付・制度学派）……………	九
	（イ）マックス・ウェーバー（ロ）ゾムバルト（ハ）ゴットル（ニ）制度学派……………	九
四	ゾムバルトの経済社会学論……………	三
五	マルクスと経済社会学……………	四
六	古典学派経済学とその基礎……………	六
	（イ）アダム・スミス（ロ）ダビッド・リカード（ハ）J・S・ミル……………	六
七	近代経済学とその周辺……………	七
	（イ）イギリスとケムブリッジ学派（ロ）オーストリア学派（ハ）ローザンヌ学派……………	七
八	パレートの経済学と社会学……………	九
九	シュムペーターの経済社会学……………	二
十	わたしと経済社会学……………	四
十一	高田博士の経済社会学……………	六
十二	フ란ツ・オッペンハイマーの経済社会学……………	七
十三	ウィーゼと経済社会学……………	九
十四	現実性と実践性……………	三

北野熊喜男……………

Ⅱ A・コントにおける経済と社会…………… 斎藤正二…………… 三五

——経済社会学的概念構成序説——

一 コント社会学の進歩と保守…………… 三三

二 コントにおける経済学的認識…………… 四〇

1 コントと初期経済学 2 経済社会学的意識の芽

三 コントの経済社会学と産業社会の概念…………… 四六

1 コントの歴史的方法 2 コントの産業社会論

Ⅲ 晩年のマルクスの思想展開…………… 大林信治…………… 五七

——西欧世界の自己相対化——

一 はじめに…………… 五七

二 『資本論』段階の資本主義発展像…………… 五九

三 世界史認識の転換…………… 六三

四 マルクス研究へのアプローチ…………… 六六

五 フランス語版『資本論』の背景…………… 七〇

六 『資本論』の論理の自己認識…………… 七五

七 資本主義の類型的認識の萌芽…………… 八〇

八 「とびこえ」論の理論的基礎…………… 八四

九 結びにかえて…………… 九〇

Ⅳ 歴史学派経済思想における経済と社会…………… 橋本昭一…………… 九五

——旧歴史学派を中心に——

一 序…………… 九五

二	リスト		五
三	ロッシャー		九
四	ヒルデブランド		一〇
五	クニース		二〇
六	まとめ		二三
	参考文献		
V	ゾムバルトの経済体制論		二七
	——その概念と政策論的体制論の考察——		
一	ゾムバルトの経済体制論		二七
	1 経済体制の理念		
	2 経済体制の形成可能性		
	3 経済体制の現実性・歴史性		
	4 ゾムバルトの体制論の性格		
二	政策論的経済体制論		二六
	1 経済体制の基本的規定要因と人間主体		
	2 各基本的規定要因における形成可能性		
	3 形成可能性の問題点		
三	おわりに		二六
VI	シュムペーターにおける経済学と社会学		二四
	一 はしがき		二四
	二 シュムペーター経済学の特徴		二四
	三 シュムペーター経済学における経済学と社会学		二五
VII	パーソンズ説における経済の社会体系的考察		二六
	一 序		二六
	二 経済の社会体系論的考察におけるパーソンズ説の中心的諸原理		二六
	1 社会体系論		二六
	2 社会体系としての経済		二六
	3 経済の制度的構造		二六
	4 経済的合理性の制度化		二六

5	経済の動態的方向と歴史的展望	
三	パーソナル説についての検討と諸批判点の提起	一七二
四	今後の課題	一七九
	ガルブレイス理論の経済社会学的考察	佐藤良一 一八二
一	アメリカの資本主義	一八一
1	はじめに	
2	拮抗力理論	
二	ゆたかな社会——その不均等発展——	一八六
三	欲望の創出——依存効果——	一九〇
四	大企業体制論	一九二
五	テクノストラクチャーと一貫性の原則	一九四
六	消費者主権の虚構	一九五
七	産業国家から公共国家へ	一九六
八	二つの体制の安定・不安定について	一九七
九	体制改革への必要な措置と問題点	一九八
	学会記事	二〇三

I 総 説——経済社会学の生い立ち

一 はじめに

経済社会学が如何なる学問であるかについては学界にいまなお定説があるとはいえない。それが何らかの意味において、社会生活の一領域としての経済生活の具体的現実注目しながら、従来の伝統的な経済学にあきたらず、その不備または非現実性を非難して、これが根本的改造をこころみ、あるいはその補完を志すことにおいて、大體一致した傾向をもっているといつてよいであろう。けれどもその学問的構成の具体的方針に関しては、必ずしも一致したものを示しているということができず、まさにいろいろな方向が経済社会学の名をもって指し示されているのである。在来の理論経済学にあき足りぬものが、それぞれその不満のいちじるしいと考える方向に、研究を傾けているというべきであろう。さらに固有の経済学のあまりにテクニカルな弧立的展開に対して、いわゆる学際的研究や中間領域の開拓の意義が多く認められつつあることも、さらにその発達にいつそのの刺戟をあたえているとみることもできるであろう。ここではその経済社会学の、わが国の内外における初期段階における生い立ちの事情を明らかにしておきたいとおもう。

二 デュルケーム学派の経済社会学

そもそも古典的な抽象的理論経済学がいちじるしい不満を呼び起こすに及んで、そこにはじめて「経済社会学」の名をもって呼ばれる研究分野への道が切り開かれたことは、とりわけフランスのデュルケーム学派においてみられることである。これこそが、経済社会学という概念の学界はじめてのものであり、今でもなお無視しえない重要性を持っている。けれども注意を要するのは、デュルケームにおけるその学問的位置である。

大体デュルケームの社会学は、三つの構成部分に分たれているとしてよろしい。それらを一貫ぬくものは、かれ特有の「社会学的方法」であり、ひろく一般に威圧をもって特色づけられる社会的生活の事実を、いわば事物 (*choses*) として客観的にかつ実証主義的態度をもって考察するのである。そうしてその広大な社会学の領域は、第一に社会形態学、第二に社会生理学に分たれ、しかも第三にこれらが窮極の目標とする一般社会学が来るのである。第一の社会形態学は、まず社会組織との関係における諸民族の地理的基礎を明らかにし、人口の量、密度、地上における配分などを研究する。第二の社会生理学は、社会の諸機能といふべき宗教、道德、法律、経済、言語、芸術に関する各分科に分たれ、いわゆる宗教社会学、道德社会学、法律社会学、経済社会学、言語社会学、芸術社会学など、すなわちこれであって、固有の社会学体系に所属しながら、やがて第三の目的とする一般社会学を準備するものである。(E. Durkheim, *Sociologie et sciences*, 1910, Simiand, *La méthode positive en science économique*, 1921)

このような第二の社会生理学の一分野として、「経済社会学」というものがその学問的地位を与えられたのであるが、それみずから社会の生理現象ともいふべき機能のひとつとしての経済現象の研究である以上、固有の経済学

そのものとの根本的な差別を明確にする学問論的意義に乏しいといわざるをえない。それ以外に経済学そのものの基本的なあり方を明らかにすることが不可能になるとおもわれるからである。すなわちここで「経済社会学」というのは、具体的に社会的な連関を無視しないように、改造を要求されている「理論経済学」そのものであったのである。あくまで「社会」事象としての客観的・実証的考察の立場に立ちながら、その生理的機能としての地位を見失わず、結果としては一般社会学に橋渡しすること、そこにかねらの経済社会学の位置があったのである。これがデュルケーム学派の経済社会学への要求であり、従来ややもすれば陥入った「抽象的・仮設的な演繹理論の排除」を力説することにその学問的性格がよく現われている。この学派の経済社会学の代表者シミアンの業績がもっともよくこの性格を示している。(Simiand, *op. cit.*)

三 歴史学派と経済社会学(付・制度学派)

このような理論経済学の孤立的な仮設的、抽象性の排除のうちに、経済社会学への道が開かれたとみるならば、同様の不満は、必ずしも経済社会学とはよばないにしても、経済学そのものの流れのうちにあって、ドイツ歴史学派のイギリス古典経済学への反発のうちに注目すべきものがあつたというべきである。ヴェブレンにはじまるアメリカ制度学派の経済学も、これに類似する傾向をもっているし、さらにマルクスの「社会の経済的構造」を中心とする考え方、物質的生産における社会関係を中軸とする見方も、根本的に同様の方向の批判を内在せしめているといえるであろう。いずれも古典経済学の孤立的な抽象性を排斥し、経済学の現実的具体性を要請しながら、すすんでその実践的性格(政策的提言にせよ、革命の主張にせよ)を求める点においても、まったく一致しているのである。

ドイツ歴史学派経済学（リスト、ロッシャー、ヒルデブランド、クニースら）は、ロマンチズムの哲学的基盤に出发しつつ、歴史主義の立場に立って次第に現実的具体性と政策的実践性を加え、つねに経済生活を国民の有機的全体と歴史的発展の流れに即して把握しようとし、まず種々なる経済発展段階説に結実し、また多くの現実的政策提言を主張した。殊に後期の歴史学派の中心グスタフ・シュモラーに及んでは、倫理的・社会改良主義的立場を明瞭にし、また時として「経済社会学の創立者」とみられるほど、経済の国民的編成、経済組織体の相関と複合を中核とするいわば社会学的研究を重んじている。（“Grundriß der Volkswirtschaftslehre.” 特二 II Halbbd. Organisation der Volkswirtschaft.）やがてこの学派は、末流の人びとのうちから、歴史的事実の瑣事に突き走る傾向も生み出したけれども、後にマックス・ウェバーの歴史的・社会学的ともよばるべき大きな業績を生むこととなり、さらにゾムバート、ゴットルなどのいわゆる経済社会学的研究を導き出す地盤のひとつとなったとおもわれるのである。

(1) マックス・ウェバー

マックス・ウェバーは、旧来の歴史学派の影響のもとにありつつ、西南学派などの哲学の影響を受け、社会的行為の動機づけとその理解や理想型構成を中心とする社会学的方法論的基盤を明らかにしたのみならず、広く歴史的社会的文化の各領域にわたって、細密な理解を示し、宗教、政治、経済、社会などの相互関連に詳細な検討を加えたのであった。とりわけ大著『経済と社会』（“Wirtschaft und Gesellschaft”）における歴史的・具体的・現実裏打ちされた社会的分析の豊かさは、ほとんど他に類比を見出しえないのであって、高くその貢献を評価しなければならぬ。もっとも彼は特に経済社会学なるものの定義を規定してはいないけれども、いろいろの社会的文化領域の相関性、なかんずくその大著の名称の示すとおり「経済と社会」との相互関係や、「宗教と経済」の関係などに立

ち入って、いのいの歴史的・具体的・現実から或は理想型化し、或は十分理解しようとした実質的努力の集積を長く尊重しなければならぬとおもうのである。

(2) ゾムバルト

ゾムバルトは、はやくよりマルクスの影響のもとに社会的関係重視の立場をとり、(*Sozialismus und soziale Bewegung*)やがて、資本主義の成立・発展・変質に関する詳細な歴史的研究に従い(*Der moderne Kapitalismus*)、さらにはより一般的な経済体制論(*Die Ordnung des Wirtschaftslebens*)を体系化し、その後理解的・整序的ならびに規制的な「三つの経済学」の方法論(*Drei Nationalökonomien*)や「社会学」やドイツ社会主義や世界観や人間論の広きに及んでいるけれども、いまなお重要性の大きいものは、(一)精神、(二)秩序、(三)技術をもって特色づけようとするいろいろな経済体制の類別とその諸規定と、右の資本主義の成立・発展・変質に関する該博な研究である。そうしてここに彼の労作の経済社会学としての中心的意義があるようにおもわれるのである。もっとも彼自身によれば、つぎに述べるように「すべての経済理論は残りなく経済社会学であると定義しているのであるけれども」。

(3) ゴットル

ゴットルの体系はもっとも独自のである。その特徴を一言に要約していえば、すなわち「欲求と充當の持続的調和の精神」による「社会的構成態」(*sozial Gebilde*)として経済を把握し、根底における生活一致と内的了解において持続と存立へ秩序立てられるゲマインシャフトや、第二に生活分裂と衝突における強制・干渉によるマハトシヤフトへの構成、たとえば国民共同体と国家権力体と国民経済のいわば三重層的構成は、まことに興味ある分析を

示すものであるけれども、ややもすれば有機的全体的な調和的な三位一体観に向かおうとする傾向を非難しなければならぬであろう。それを調和的全体としてではなく、互にその範囲をも異にしつつ、多元的・累層的に重畳して、しかも相互に作用するゲマインシャフト *Gemeinschaft*（共同体）とマハトシャフト *Machtschaft*（勢力または階級社会）とウィルトシャフト *Wirtschaft*（経済）との相關関係を分析するものとみると、その特有の分析は十分にかえりみられるべき意義をもっているのである。近頃の経済学のように、ほとんどこれを無視するのはなく、改めてこれを反省しながら、そこに内蔵されている多くの経済をめぐる社会学的分析のうち、批判されるべき見方と、摂取さるべき貢献とをはっきりと区別し、永くその価値の認められるべき分析成果を見出して活用することが肝要であるとおもわれるのである。経済学界もあまりにも極端に右に行き、左に傾き、いわば流行を追いつめるようである。（Gott-Ortlienfeld, "Wirtschaft und Wissenschaft," "Wesen und Grundbegriffe der Wirtschaft," なほ注目すべきものとして福井孝治著『経済と社会』がある。）

(4) 制度学派

アメリカの制度学派の経済学は、いわばこれという歴史を持っていない国での歴史学派のようなものである。旧ドイツ歴史学派のような哲学的傾向はなく、どちらかといえば実証的傾向がいちじるしいけれども、人間の経済を具体的な社会生活全体の制度的関連のうちで捉え、これを孤立化し、抽象化せしめることなく、現実的に把握しようとする点に特色を認めるべきである。もちろんアメリカ的科学といわれる社会学の影響がまったく存しないとは言えないにしても、特定の社会学的理論の性格をもって明瞭に特色づけられることは出来ない。今日数学的理論で特徴づけられるアメリカ経済学界の底流においてもなお制度派的ともいえるべきものが生きていることを注目すべきである。

四 ズムバルトの経済社会学論

この間、きわめて明瞭に「経済社会学」の概念に關説し、しかも「すべての経済理論は残りなく経済社会学である」と断定するものはズムバルトであった。つまり彼にあってはすべての人間共同生活の理論は、そのすべてが社会学であるからである。それが普遍的なものについての科学、すなわち理論である点において、特殊的なもの、歴史とは異なっているにすぎない。しかも彼はすべての文化を二分して、ひとつは社会そのものである領域、第二は社会をもつにすぎない領域であり、後者では社会関係をかえりみないドグマティクが行われるが、前者はすべて社会連関の理論であり、事実上そのまま社会学以外のものではありえないと考えている。そうして彼によれば、経済は法律や国家とともに、実に前者すなわち社会そのものである文化領域に属するとするのである。その整序にあらずかる理論科学としては、第一に価値判断から自由でなければならず、第二に理解による科学であり、さらに第三に本質上社会そのものを対象とするのである。「純粹経済学などというものは概念することも出来ない」(Urbegriff)と。「経済学はその理論に關するかぎり、そのまま経済社会学以外の何者でもありえない」と考えている。

このようにすべての人間共同生活の理論を社会学と考へ、しかもすべての文化のうちに社会そのものである領域と社会をもつにすぎない領域とに分ちつつ、しかも経済を国家などとともに社会そのものである領域に数え、すべての経済理論は残りなく経済社会学であるとするのは、本来厳格な意味の社会の本質と明確に區別せらるべき経済の本質とを混同する恐れのあるものである。法律や国家にさえ、社会を離れたドグマティクを認めながら、経済に關して社会的連関を離れてそれ自体の研究しうることをまったく認めないということは、あまりに経済を社会的連関においてのみ考へようとする偏見であるといわざるをえないのである。経済には、社会と結びつきながら、社会

そのものではない固有の領域があるのではないであろうか。

なお彼は特殊の文化領域を取扱う特殊社会学以外に、歴史の全過程を研究の対象とし、各文化領域の間の必然的な、あるいは可能な関係を取扱う「普遍的社会学」(Universalsociologie)と、一般的に關係、過程、構成態を把握する「一般的社会学」(Generalsociologie)とを認めているが、いずれも経済学と社会学との關係の問題には、係わりがないとし深く問題としていない。けれども経済社会学の根本的意義は、經濟生活とこれら二つの社会学との係わりにおいて問題とすることにおいて、すなはち第一その普遍的社会学と称するものとの關係において、第二にそのいわゆる一般的社会学との係わりにおいて、追及することにおいてこそ、重要な意味を見出しうるのではないであろうか。(W. Sombart, *Nationalökonomie und Soziologie*, 1930)

五 マルクスと経済社会学

もともとマルクスは經濟を全体として歴史的な社会的過程、特に社會關係の複合体としての性質に重きをおいて考えていた人である。如何にも彼は生産のうちに經濟の基本的な過程を見いだしているけれども、生産において人間の自然へ働らきかける交渉過程そのものは、ただ經濟以前の單純なる技術的現象とみ、あくまでそこにおいて人間相互の立ちいる相互交渉、いわゆる生産關係の研究にこそ、經濟学そのものの基本観点をおいたのである。なかになくそこにおける階級的關係こそはその検討の中心でもあった。この意味でマルクスの經濟学は、すぐれた意味において經濟社会学的でもあったというべきであろう。もちろん彼は經濟社会学の名を用いてはいないのみならず、マルクス派の人びともしばしば社会学の立場の、中間階級的ともいいうるイデオロギー的性格を批判しているようである。けれどもともかく彼の場合、經濟が社会的とくに階級的社会構成と切っても切れない結びつきにおいて考